

知多西浦十四ヶ村融通念仏虫供養組（佐布里、寺本、養父、横須賀、大里、加木屋、姫島、木田、荒尾、名和、吉川、半月、長草、大高の十四ヶ村で組を作った）が、毎年、秋に一月間、寺本の神明社裏の海岸で供養の行事を盛大に挙行した。この大供養が行われた所を、この土地の人々は、「供養場」と称してきた。

さて、この供養の折、尾張藩主二代目の光友公が参拝に來られた。その折、公は当虫供養に、五具足（御深井焼花瓶一對、同上焼香炉一個、燭台一對）を寄進された。その後、この虫供養は、大発展をし、この期間には、海の向うからも、船で参拝に來たそうだ。尾張藩主もその後七代までは、一度は必ず参拝に來られ、その度に、阿弥陀さんの掛軸、三幅対の名画を贈られたそうだ。かように盛んであった虫供養組も時勢の流れに抗し得ず、明治九年に解散した。その後は、寺本虫供養組として、念仏と供養を続けてきた。現在は、平井上平井、廻間、中島の各組で細々ながら、守り続けている状態である。

さて、尾張藩主二代目の光友公が寄進された御深井焼大花瓶のことだが、立派な花瓶だとは思っていたが、その真価は土地の人々はわからず、言わば、世に埋もれた状態であった。それを見出し、世に出した人は、当時の常滑陶芸研究所長の沢田由治氏であった。

一九七四年、沢田氏は他の用事で法海寺に來られた。そこで偶然花瓶の話が出た。氏は、この花瓶を一目見てびっくりされ、「これは大変だ。こんな名器が寺本にあるとは。徳川美術館にもありません。日本に、ただ一つの名宝である」と折紙をつけられた。

丁度その頃、東京の根津美術館と徳川美術館、それに、大阪市立美術館のそれぞれで、一か月ずつの会期で名陶展を開催する計画がすすめられていた。沢田由治氏は、寺本で発見した大花瓶のことを、徳川美術館長の熊沢五六氏に話した所、他の根津美術館、大阪市立美術館の責任者たちも、是非拝見したいという話が沢田氏からもたらせられた。

そこで、当方としては、加古八幡区長、加古知多市文化財委員長、常光院と法海寺総代と、大乘院の水野さんとで協議した結果、了承ということになった。当日は、東京、大阪の美術館から一名ずつと、徳川美術館からは熊沢館長と同館の学芸部長大河内定男氏（現、徳川美術館長代理）が、沢田由治氏の案内で大乘院に來られた。

ものものしい来訪者に、私たち総代は緊張して、当の大花瓶を運び出してきた。来訪者たちは、大花瓶をじっと見つめられ、しばし無言で息のつまった一瞬が流れた……。やがて、感嘆の声が皆の口からはとぼしり、緊張がほぐれた。この糸口を作った沢田由治氏も、さも満足気に、にこにこはほえんでおられた。こうして、日の目を見た大花瓶は、名陶

展に出陳され、天下の愛好家の眼を楽しませることになり、それが縁で、名陶の書物には、必ず、その写真が掲載された。なお、余談ではあるが、徳川美術館長の熊沢五六氏は、市の文化財委員長加古文雄氏と第五中学校で同期生であり、この席で、久方ぶりに遇われ、懐しさのあふれた挨拶をし合っておられた。

その後、昭和五十一年二月二十日に、知多市も、この大花瓶を文化財として認定した。こうしたことがあってから、この花瓶は、それまで、常光院の物置きの一隅に置かれていたのを、法海寺の蔵に納め、法海寺と常光院の総代が保管することにした。そして、他へ出陳等する場合は、八幡区長の許可を必要とするように取りきめた。

なお、北川正巳君が秘蔵する書物の中に、西浦十四ヶ村虫供養組の村名や、花瓶が贈られた天和元年（一六八一）の年号とか、供養組の宝物等が書かれていたことを付記する。